

病院から学校まで～人を育むもうひとつの家として

協働が生む、誇りを持てる生活環境

川向 第3回は、ゲストに建築家の藤木隆男さんをお迎えしています。最近、「もう一つの家」という考え方が、「家」そのものの内部からも、病院や学校などの公共施設の側からも求められるようになってきます。実際、大都市内やその郊外に、あるいは地方のまちや村に新しい形の「もう一つの家」が現れる一方で、「家」のほうが古い常識・慣習・制度にしばられて危機的状態にあるようにも思えます。藤木さんは、「もう一つの家」の空間の要素、イメージとして「木漏れ日」を挙げておられますが、画像を使いながらその意味を説明するところから始めていただけますか。

木漏れ日空間

藤木 木漏れ日という言葉に関して、一枚の画像をお見せします（写真1）。これは、日立という企業の商業的の背景に出ているシーンです。「この木、何の木」という歌に出てくるハワイのモンキーポッド、別名アメリカネムノキという木のようですが、このシーンで私が着目するのは、木の下に広がる空間です。それを私は、木漏れ日空間と呼んでいます。広い芝生とか青い空とか、そういう爽快な場所や時間もこのシーンから感じ取れますが、日常の生活環境として考える場合に、私が着目するのは木漏れ日のほうです。木漏れ日こそが最も過ごしやすく、居心地の良さを生み出す要因だと思っております。



ねむの木の下「木漏れ日空間」（写真1）

川向 いろいろな要素が微妙なバランスで存在する空間ですね。空気そのものようで、陽光の暖かさも光のきらめきも含まれています。すべての要素が揺らぎ、動いて、生きていますね。

藤木 はい、これは私どもの東京杉並の事務所が入る建物です（写真2）。この4階の一角に私たちのアトリエがあります。本当に小さなアトリエですが、私はここを木漏れ日空間と捉えています。武蔵野の面影を残すようなケヤキの、わりと大きな木のあるお屋敷だったようですが、その木を囲むようにコンクリートの無機質な共同住宅をつくっています。昔の記憶と現代のニーズを掛け合わせたような中庭、その中庭に車が入ってきて停まり、バイクも自転車もああります。生活者が行きかう風景の中に仕事をするスモールオフィスがあって、それは高木の緑陰、地面を覆う芝生、壁を這うような植物に包まれています。つまり、異種の要素が混在する状態に居る心地よさに満たされています。



人、車、緑と建物が共存する杉並の「アトリエ」（設計：井口浩）（写真2）

光や風へ

川向 私は、かつて本紙で現代建築に関するコラムを担当したときに、藤木さんを現代日本の代表的な有機的建築家の一として取り上げています。当時の私は、藤木さんの建築に、大地に根をはり天に向かって伸び、水平方向に大きく枝を広げる大樹のようなイメージを抱いておりました。まさに「この木、何の木」のイメージです。空間の骨格の確かさは変わりませんが、今のお話をうかがっていると、木そのものではなく、枝や葉の間を抜けていく光や風、地面の芝生や壁のつたなどの方向に、藤木さんの関心が向かっているように感じます。

藤木 ああ、そうかもしれません。東京都小平市にある児童養護施設、東京サレジオ学園（坂倉建築研究所）は数年前に私たちのアトリエで改築されて、川向先生に聖堂や児童園舎を見ていただきました。比較のために、その中に最近設計した「再チャレンジホーム



雑木林の中の東京サレジオ学園「胡桃の舎」（写真3）



同上部、柱・梁で組まれた集中形式吹き抜け空間（写真4）

・胡桃の舎」（写真3、4）をご覧ください。これは、望む高校に通うことに何らかの理由で失敗した子どもが再受験して高校に行き直すために生活する家です。300平方メートル程度の木造2階建ての小規模な施設です。サレジオ学園全体はかなり広くて、その奥の方に敷地が与えられました。児童養護施設は3歳から18歳までの子どもが住み、他方、この再チャレンジホームは、高校生が勉強しながら生活する家です。遊び、自由に伸び伸びと暮らすための児童養護施設と比べると、こちらは目的意識がはっきりしています。ですから、やや強い独立性を感じさせる集中形式の外観を採用しています。プランは十字形で、屋根も切妻屋根が十字に交差しています。そして、裳階（もこし）と言いますか、スカートのように柔らかな足元を覆う庇を周囲に巡らしています。これには、建物を保護して木造の基礎周りを十分乾燥した状態に保ち、長寿命化を図る目的もあります。

これまでのサレジオ学園では全て鉄筋コンクリート造でしたが、ここでは、迷うことなく木造を選択しています。屋内も同様に集中形式の空間構成で、真真中に吹き抜けのホール／食堂があり、四方にキッチン・リビング・音楽スペース、それから談話コーナー・スタッフルーム、さらに玄関・トイレ・浴室などが入っています。2階の四面に、子どもの居室が6室並びます。コーナーはガラスを多用して光がふんだんに入り、吹き抜けの天井からも光が落ちてきます。吹き抜けホールでは、木造のフレームを際立たせて回廊を周囲に巡らせ、集中的な空間構成をより強く感じさせています。2階の周囲に並ぶ6室は、シナ合板の板張りで平均7畳ほどの個室です。「胡桃の舎」は、このように個室形式を採用したグループホームです。

いくつもの形式の重ね合わせ

川向 藤木さんの建築は、社会の変化をクリアに映し出しています。もはや終戦直後の、とにかく大勢の子どもを収容しようという児童施設ではなく、現在では子どもたちに個室と共用空間が与えられて、共用空間の周囲に個室が並ぶ構成になっています。この大きな変化も藤木さんが課題の一つとして誠実に対応した結果にすぎないようです。「こう、あらねばならない」という教条的な姿勢ではなく、子どもたちや世話をする大人たちにとって真に望ましい「フォーム（FORM）」を、その時、その場所で見出すという姿勢が常に感じられます。さらに言えば、フォームという言葉は藤木さんの場合、個々の「形態」よりも、関係性を含む「形式」と理解するのが正しいようです。ご自身の今の説明でも、集中形式、十字形式、回廊形式、そして個室形式という表現が使われましたが、大地や空や樹木との関係、あるいはその場に展開する人間関係が形式にまとめられ、いくつもの形式が整合性をもって重ね合わされているように感じました。

藤木 胡桃の舎まで二十数年にわたって、私たちはサレジオ学園の建物の設計と管理にかかわってきましたが、確かにサレジオ学園の社会福祉法人としての経験と私たちの建築的な経験とがそれぞれに蓄積され凝縮されて、建物が出来上がっているように感じます。小平市にある東京サレジオ学園の園舎などが整備され、記念聖堂が竣工するのは1980年代のことです。当時は建物のほうが大きくて、樹木は小さく添え物のようでした。25年ほど経った現在では、樹木が育ち学園のスカイラインを決めるほどになっています。そのお

かげで深みのある木漏れ日空間に囲まれて、学園の環境は、建築的にも生活空間の充実度としても佳境に入ってきたように感じます。

もともとは修道会を団体とした福祉法人が、戦災孤児を集めて孤児院を始めたのが、学園のスタートです。建物は陸軍兵舎の払い下げでした。80年代の建て替えまでの戦後40年間は、いわゆる大舍制をとり、同年齢の子どもたちを集団としてケアし養護していました。園内に学校があって園内教育をしていたのも、この時代の特徴です。しかし、建て替えを契機に、できるだけ家庭的に個別に子どもたちを養護する、小舎による養護に切り替えることになりました。子どもたちは、園外の学校に通うようになります。

開かれていく～1980年代の転換

川向 80年代というのは、小布施でも現在のまちづくりの起点となる「町並み修景事業」が行われるように、それまで進められてきた近代化・都市化・機械化などが見直される大転換期で、すごく重要ですね。小さく閉じていたものが、一気に開かれていきます。モダンからポストモダンへの転換と言ってもよいと思います。新しい発想、新しい手法が噴出する時代です。

藤木まさにコベルニクスの転換です。私たちも相当に刺激したつもりですが、サレジオ学園が非常にドラステックな転換に取り組むのが、この時の改築事業です。では、サレジオの新しい家づくりは、どういうものだったのか。

新しい児童園舎の一例を挙げますと、鉄筋コンクリート造で460平方メートルほどの広さがあり、ここが17人の子どものスタッフ4人ないし5人の「家」になります。「家」と呼ぶならば、どのような平面形式と内部空間の質を備え、どのような外観にして景観を構成していくべきか。当時の私はまだ坂倉建築研究所の一員でしたので、研究所内部でずいぶん議論を重ねました。前例がほとんどなく手探り状態だったことを思い出します。結局、私たちは住宅については経験を積んでいたので、児童養護施設というよりも子どもたちの住宅を設計しようと目標を定めて、学園スタッフで構成される建築委員会からヒアリングしながら基本設計を進めていきました。

もう一つの家へ～「家」の脱構築

川向 個々の「家」のあり方と、サレジオ学園全体とか地域社会全体との関係が、根本的に捉え直されるわけですね。小布施の修景事業でも宮本忠長さんを中心にして、個々の「家」のあり方と家並みの全体構成との関係が再構築されますが、非常に似た現象です。全体としては、個々の町家が並ぶに代わり、町並みの復原ではなく、景観と称して、もっと広い脈絡の上に構築直されました。それは同時に、今日のテーマである「もう一つの家」が議論され始めたことを意味しています。決して「家」を否定し、消滅させるのではない。「家」を継承しつつ、新しいあり方に変えていくわけです。当時の表現によれば、脱構築です。それは、ポストモダンの扉を開くための議論だったとも言えます。では、そこで重視されたのは何だったのか。

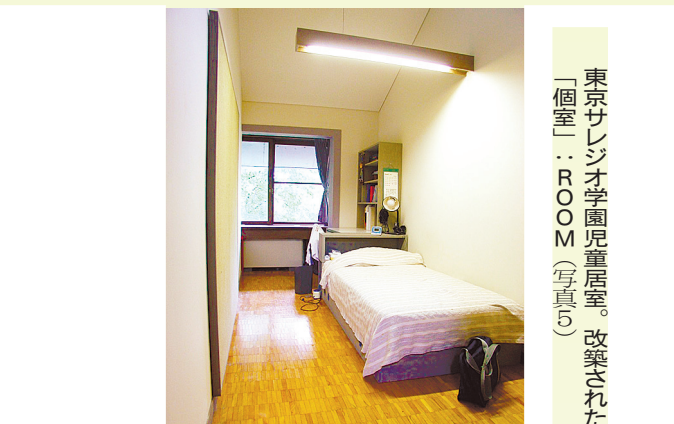
藤木 当時の私たちにも、全く未知の領域に踏み込む感じがありました。ですが、設計事務所としての「家」「住宅」に関する長年の経験に基づいて、いくつかの方針が立てられ、その一つが、子どもに馴染みのある住宅の設計をしないことでした。子どもたちの家だからと言って、子どもが喜んで飛びつくような色、形、造作にはしない。逆に、施設設計でよく挙がる「安全」「維持管理しやすい」「機能的」といった条件については、全く無視するわけではありませんが、どちらかと言えば「温もりがある」「手触りがよい」といった、より人間本来的、日々の生活で心身に直接影響を与える条件のほうを尊重することにしました。子どもたちだけの住宅だとか養護施設とか特殊な条件に頭を悩ませるよりも、むしろ、普通の施設としてのクオリティを高めて子どもの心身の充足を目指すのです。そして、そのハウスキープをスタッフや子どもなど自分たちでできるように配慮しました。

自然な、文化の豊かさ

川向 私は、新しい建物 completes するたびに幾度となく園舎も拝見していますが、園内で出会う子どもたちの表情の明るさ、生活態度の良さにいつも感じます。子どもたちは、ハウスキープを自分たちでやり、礼儀作法を身につけています。それが強制ではなく自発的にできるところが素晴らしい。生きる場所に誇りをもっていることは、自分の生きるまちや村に住民が誇りをもつという「まちづくり」が実現しているに通じます。

藤木 ありがとうございます。子どもたちは現在、園外の学校に通っていますから普通の友だち関係を楽しんでもらいたい。そのときに自分の生活環境に誇りをもつということは、私たち関係者の最も願うところです。

私は、人間形成にとって「ルーム（room）」が大切だと思っています。児童養護施設ですと、聖堂や

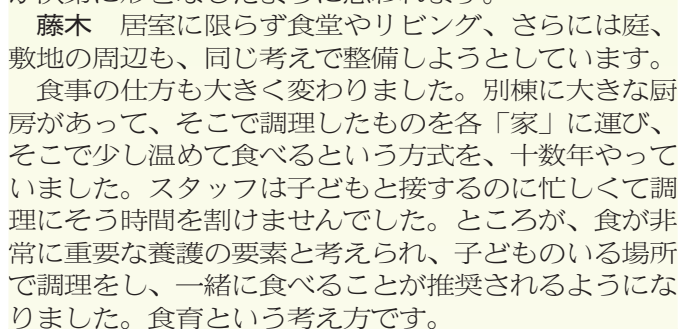


東京サレジオ学園児童居室。改築された個室（写真5）

応接室ではなく子どもたちの居室です。学校ならば普通教室、病院ならば病室です。サレジオ学園のルーム、すなわち子どもの部屋をお見せします（写真5）。かつては四人部屋だったものを7、8年前に個室化計画によって個室と二人部屋に改築しています。2段ベッドは全く使いません。窓があって、ベッドと机と収納棚という、いわば3点セットが、どんな小さい子にも与えられて、ルームが構成されます。ベッドおよびベッド周りが、子どもにとって生活の拠点になります。ベッド周りは、スタッフがエネルギーを注いで清潔に保つように心掛けます。シーツ、アッパーシーツ、毛布、タオルケット、ベッドカバーといったものが季節によって多少変わりますが、常によく整えられています。教える、しつけることをしないで、常にスタッフが身近にいて支えることにより、子どもたちは自然に自分たちの身の回りを整えるようになります。子どもをしつけてやらせることをしないのが、園の方針です。

川向 「建築とまちづくりのゆぐえ」という枠組みで、藤木さんに語っていただいたかったのは、まさに、この部分です。子どもたち自身が、強制ではなく自然に、自発的に生活環境を整えます。そして、自分の生きていく場所に誇りをもつようになる。このような状況が自らの手で維持されるようになっていきます。根底には、やはりサレジオ学園のもつ大きな思想があります。そして、建築家だけではなく大勢の人々が協働し、日々の中で繰り返されることによって、それが次第に形をなしたように思われます。

藤木 居室に限らず食堂やリビング、さらには庭、敷地の周辺も、同じ考えで整備しようとしています。食事の仕方も大きく変わりました。別棟に大きな厨房があって、そこで調理したものを各「家」に運び、そこで少し温めて食べるという方式で、十数年やっていました。スタッフは子どもと接するのにも忙しくて調理にそう時間を割けません。ところが、食が非常に重要な養護の要素と考えられ、子どものいる場所で調理をし、一緒に食べることが推奨されるようになりました。食育という考え方です。



同キッチンとダイニング：オープンな関係（写真6）

このキッチンは、ダイニングスペースと壁で仕切られていたのですが、その壁を大きく切り抜いてダイニングの子どもたちとの対面式に改修されました（写真6）。調理から食後の片付けまで、私たちと学園スタッフとの間で数々議論してシンク、調理台、ガス併用のIHヒーター、大型の食洗器を組み込んだものを設計しました。「サレジオキッチン」と呼んでいます。すごく実用的です。

見た、サレジオ学園の年中行事も夏の七夕、秋の月見、冬のクリスマスなどを残して、最近ではできるだけ町のイベント、通っている学校の行事に参加するようになってきました。園内には聖堂・小聖堂、その間に地域交流ホーム（集会室・図書室・音楽室があり、卒園生が宿泊できる和室、お茶室など）もありですが、子どもの権利条約とか、特定の宗教を強制すべきものではないと行政から言われるようになって、カトリック的な行事・活動は、次第に自由参加に変わりつつあるのです。

川向 その結果、使用頻度が落ちた建物・設備をどう活用して維持するかという新たな課題も生まれていくでしょう。藤木さんと学園スタッフの協働による次なる取り組みについては、別の機会に。ひとまず、終りとします。今日は、本当にありがとうございました。

川向 正人（かわむかい・まさと）現代建築都市研究所、東京理科大学理工学部建築学科教授、1950年生まれ、1974年、東京大学建築学科卒業、ウィーン大学・ウィーン工科大学留学を経て1981年東京大学大学院博士課程修了、2005年から東京理科大学・小布施まちづくり研究所所長。



藤木 隆男（ふじき・たかお）建築家、1946年山形県生まれ。69年東京都立大学卒業、71-90年坂倉建築研究所勤務を経て、90年藤木隆男建築研究所設立。95-01年東京都立大学助教授、02-04年芝浦工業大学特任教授、05-06年明治大学客員教授を歴任したほか、東京電機大学、東京理科大学、日本女子大学非常勤講師など建築教育に積極的にかかわる。主な建築作品に東京サレジオ学園（吉田五十八賞）、育英学院サレジオ小・中学校（日本建築学会作品選奨）、宮城県立がんセンター緩和ケア棟（医療福祉建築賞）ほか。また住宅作品として岐阜「西部の家」、軽井沢「二手橋の家」、「西荻の大和齋き」などがある。



川向 正人（かわむかい・まさと）現代建築都市研究所、東京理科大学理工学部建築学科教授、1950年生まれ、1974年、東京大学建築学科卒業、ウィーン大学・ウィーン工科大学留学を経て1981年東京大学大学院博士課程修了、2005年から東京理科大学・小布施まちづくり研究所所長。

▷第2回講義一松岡恭子氏、10月11日付掲載